

烽火

紙4 一部 40円
1961.12.23 発行
編集責任者 飛鳥浩次郎

目 次

主 張

春斗と戦斗的労働者 (1)

学 生

全学連の再建と統一を断乎として推し進めよ

..... 山下明宏 (4)

○文化時評

「前衛主義批判」の流行に思う (7)

全国ニュース

1) 長崎造船社研の斗いとその問題点 (9)

2) 烽火編集委員会を中心とする

関西ブントの動き (11)

戦場だより

1) ふきあがる若年無党派活動家

のエネルギー 園田 浩 (13)

2) 京大教養部自治会選挙

社学同の勝利に終る .. 茂田 一 義 (14)

編集後記 (16)

京都市上京区烏丸公出川同志社大学構内

社学同京都府委員会気付

労働者協会 Tel 04 1131学内 376

主張

春斗と戦斗的労働者

(一)

来たるべき春斗に対する準備が開始されている。一九六二年は六一と比べて二ヶ月がたとりくみが速いといわれており、事実すでに総評の春斗方針案もすでに提出され、一月中旬までには各単産の要求提出がなされようとしている。

総評の要求の中心は何といつても「大巾賃上げ」にあり更に炭労合理化にともなう人員整理に対する政策転換斗争にある。総評は要求の立脚点を日本の低賃金と、生産性のびに対する賃金上昇の低さにおいている。(一九五五年を一〇〇として生産性六一・六%ののびに対し、労働賃金一二・九%)総評は今年の大巾賃上げを獲得するならば、「この実績が労働組合の恒常的な力量となつて、低賃金構造を打破する才一歩がもたらされることとなる」とし、積極的な姿勢を打ちだしている。

しかし客観的情勢としてはどうか。例えば杉田正夫は好況期に大巾賃上げをという角度を「学習の友」(一九六一年一月号)にかいた。ヴァルガは景気循環と労働組合の賃金要求についてかいた。また実際問題として不況期における労働組合の課題は賃

金ストツプから賃金カット、遅延、現場与給へとかけてくる資本のしわよせ政策に抵抗すること、及び人員整理への低抗にとりくむという点に特徴がみられる。そこからみて総評のいうところの資本家側の不況宣伝に対して賃上げムードをつくりだすこと、或はここ数年間の生産性対比ののびを専ら前面におしだすことは、確かにムードをつくりだす点、及び宣伝としては有効であると思われるがはたしてそれで充分であろうか。日経連が日米経済合同委員会(箱根会談)以降、日本は低賃金ではないという宣

伝を開始したのに対し、低賃金である故に大巾賃上げでは問題が極めて抽象的になるのは当然である。そしてこの点に対して日本が低賃金であり大巾賃上げが当然との観点を持ちつつも「最近の景気後退の影響は認め、この影響の現われているところでは「一時金」などで調整をはかると弾力性をもたせている」(日経、十二・一一)という全労の切り込みの余地がある。

(二)

さて現実の経済情勢は、高成長の名のもとに強行された強蓄積(高度独占間の設備投資競争)の結果、国際収支の悪化を招き、政府(大蔵省)、日銀の数次にわたる金利引上げや投資くりのべ等の金融引締、景気調整政策がいまや進行している。そして来年にむけての経済情勢は政府のデフレ政策と、その中の独占資本への保護、非独占中小資本へのしわよせ、そしてなによりも労働者階級へのしわよせがたくまれている。しかしそのデフレの性格が、過剰生産との関連で、即ち国内市場のいきづまり、

生産と消費との矛盾との関連で問題にされている。投資の抑制は直ちに日本の年功序列賃金制度にもとづく雇用関係の弱い点、臨時工、社外工にひびき、更に中小企業労働者にひびいてくる。経済情勢がこのようなものであり、しかも急速な資本の投資競争がこれをもたらしているときに、大巾な上げはいうなれば企業の中に貯えられた「自己金融」の中から、賃金への分配分を大中に取りもどそうとする要求であることを意味する。とするならば六二年春斗においては、「大巾な上げ」要求は、極めて戦線的な要求であり、産業部門によつては容易に獲ちとれるものであつても、全労働戦線の要求としては嚴重なる組織体制をもつて保証されなければならぬ。いふならば、景気後退期においてきまつてあらわれるところの総評幹部の日和見性は、その裏に極めてつよい戦闘性をもつており、それが歴史的には常に引きさかれた形で発現されて来た。これからひかえようとする春斗とそれをめぐる情勢の中で、果して「力」に支えられた要求獲得斗争はいかに準備されているだろうか。

(三)

先にのべたような情勢にもとづき、日経連は春斗相場「三〇〇〇円」に対してこれを「屈服賃金」であるとしている。そして春斗へのはびきを避けるという点からも、また今年末の事実上の資金ぐりの困難から年末一時金に対しては枠をはめるという態度にでている。全体としての年末一時金の動向は、その点からみて遅延や、現物支給をもちあわせ昨年よりも下まわる、ないしは賃上げをしても総額としては昨年と同様といった線がでてくる。

このような動きに対しての総評の体制は、統一斗争としてのたてまえを中立労連と共闘委員会をくむことによりとつて、九十単産、五百五十万人の参加という戦後最大規模の闘いの体制をつくらせている。また先述のように要求を例年より二ヶ月もはやめ、要求のムードをつくらうとしている。だが各単産の取りくみとはいえば、日経がスツパキしたように最強の炭労は政戦斗争で手一杯、私鉄総連、合化は全労攻勢の矢面にたたされ、鉄鋼は下部組織の要求をまとめるに大高、成長産業の電気労連は中立

労連であり、公労協は六一年春斗で大量処分をだし更に人事院勧告プラス昇昇に期待といった動きを示している。しかも「力強い体制」「力の背景」という場合それは戦場での闘いの体制、戦場斗争の強化という線による産業別への指向であり、公労協（一単産一企業）以外の場合、産業別統一斗争がかげ声に終る可能性が充分にある。とすれば、一応各単産からだされるストライキへの呼びかけに対応して強い戦場一組合、或は全金などが戦闘的にとりくむとしても、再びその左翼的、戦闘的性格が産業別統一斗争にあらわされるよりも「左翼的な政治的スローガン」の宣伝と結びついた突動的な闘いにしかならない可能性は十分ある。

四

われわれは、一九五六年の春斗における民間の指導の枠をはみでるような労働者の力量に支えられながら、既成指導部への新左翼の運動のイメージをつかもうとした。確かに景気後退にもなつてくりだされる資本攻勢と、それに対する労働運動のとい

うよりも労働者の闘いのエネルギーほど既成左翼の指導と大衆の斗争力の衝突を大規模に準備するものはない。現在展開される日本の労働者階級戦闘性はそのいみで街頭的、アナキー的である。しかし依然としてそのような戦闘性は無党派左翼として存続しており我々新左翼の内部に深くつみ込まれている。しかし我々の五六年以降の経験は、この力量が未だ部分的であり、それを全体に拡大するためには全体としての労働者階級の動向との関連で、即ち産業別統一斗争を戦闘的に展開できるような「カン」を見出さねばならぬことを教えている。トロンキーがゼネストについてのべているように、アナキーなエネルギーに完全に依拠した時点、自然発生性に完全に依拠した時点に展望を見出すことは「前衛的」な観点からみて、とつてはならない手段である。したがって既成左翼に対するアナキーな戦闘力が部分的にせよ存在し、それを全面的にひろげることの効果と見通しをかたるのみでは、即ち逆説に依拠した点からでは、全体との関連でのみ敗北にも耐えられるところの自らの展望をもちえないことになる。われわれの経験した時点に、むしろ典型的

な姿において大正行働隊や、東京の社学同をみる。

全体との関連でみるところのアナキーなエネルギーの評価、それが我々の春斗に対する現実的な角度となる。それは戦場斗争、或は斗争委員会における労働者の左翼的エネルギーへの期待であると同時に、日本の労働運動の全体の発展の方向、真の産業別統一斗争へのそのエネルギーのからみあいについての一つの見通しとなつてあらわれなければならない。

現在そのようなものとして「最低賃金制」へのとりくみが叫ばれている。新左翼陣営内においては最低賃金制は殆んど不統一のままにおかれている。即ち理論的には地域別、産業別最賃のとりくみが順序として考えられ、今日そのような動きはだんだんつよまつてくる。しかし労働者の闘いの気分としては全国一律に戦闘斗争を見出すといった具合である。

大巾な賃上げが、六二年の客観情勢の中にあつては確かに日本資本主義の資本蓄積構造への挑戦を意味するものであり、またそれはいかなくても攻撃は最大の防禦なりという観点からとりくまれるものである以上、

日本の低賃金構造への挑戦としての最低賃金法の法制化、全国一律協定は必要な闘いである。だが業者間協定が成立し、現実に行進する地域別産業別の動きは、最賃制成立への一つの過程をつくりはじめている。その点で、総評の大巾な賃上げへの取りくみと、その成果にもとづけばこれが全面的にとつても、現状では依然として力点は賃上げにかかつているといえよう。（我々は来年早々の春斗への具体的プログラムでこの点を明らかにしたい。）

(五)

以上、極めてまわりくどい表現となつたが、我々は斗争のエネルギーの源泉としては総評の六二年春斗方針案にかなりの期待をよせつつも、今年の経済情勢のもとでそれを具体化するにあつてのとおりくみの姿勢、準備について云えば、伝統的に右への妥協、左の自然発生的斗争の徴候をみる。それ故に我々はそのような左翼的労働者の切断された線をたぐりもどし、それに全体の労働運動との関連でどのような突破口を見出すかについて今年春斗の独自の課

題とする。

更につけ加えるならば、経済的な危機の進行は、国際的情勢と密接にからみあいなから、成熟した、即ち生産と消費の矛盾をも内含した形で進行しており、基本的にはブルジョアジーは海外進出（日韓台のライ

ン、東南アジアへの進出）に政治経済的

全学連の再建と統一を断乎として推し進めよ！

学 生

京大教養部自治委員長 山下 明 宏

私は十二月の選挙に於て、マル同、民青等の諸君を圧倒的に打破つた新委員長である。我々の選挙に於ては、学生運動の統一問題が重要な論争点であつた。私が委員長選挙で明らかにしてきた点を文章にまとめ、全国の学友諸君に提起する。

学生運動が、その政治的性格をすてざることなく、強固の中央指導部のもとに、完全に統一した運動として、展開されるためには、全国的な形で、運動を完全に指導出

る。東南アジアへの進出）に政治経済的

方向を見出そうとしている。その意味で今年の春斗は直接に4、5月の政治情勢、参議院選挙などに進展していくのである。この点からも春斗に対する取りくみは決定的に重要である。

来、一個の前衛組織が、全国の本字に組織されねばならないことは言までもない。したがつて、我々の立場に於ては、原則的に統一学生運動の実現は、関西学同の全国制覇によつてはじめて可能となるのである。だが、現在、学生運動が、完全に四分五裂している状態は、決して偶然ではなく、労働運動の極めて深刻な危機、革命運動の混乱の完全な反映である。学生層がその意識性に於て特徴づけられるが故に、極めてはげしい分裂の様相を呈しているのである。我々の存在、云はば、地

方政治サークルとしての「関西学同」の存在も又、かかる反映なのである。したがつて強力な全国的前衛の実現はいま少し、時間のかかることである。即ち労働運動の前進のある程度の実現を前提としてはじめて可能である。しかも、権力の側の攻撃の強化、学生層への分裂政策の強行、情勢の危機への進行は、「我々が、全国制覇を行うまでは、全学連は統一。再建出来ない」とはいつておれない状況を生み出しているのである。

京都府学連への相次ぐ弾圧の問題をとらえても、この問題は極めて明らかであり、日経連が「いまや全学連は分裂によつて勢力衰微し、民青が左翼動員の中核をなすつつある」とのべている状況が長つづきするならば、社会学同の全国化なるものも、完全なる空語に転化していくのである。この間の我々の闘いの課程すらも、統一全学連ということでの他潮流との全国的交流なくして、社会学同の全国化は出来ないというこ

とを明らかにしてきたのである。ここに、我々が、冒頭にのべた形とちがつた「統一戦線」全学連の再建、現存する諸潮流の対立を認めたと上での協定による全

学連の統一として、現在の全学連統一問題をのべねばならぬ根拠があるのだ。

その観点からのべれば単純明解。全ての加盟自治会を大会に結集せよである。統一戦線「全学連」とは全学連を本来の姿に返せということである。なぜなら、全学連とは、全員加盟の自治会に基盤を置く限り、本来的に統一戦線でなければならぬから。だが、この明確なる事を認めない部分が存在したのである。マル同であり、民青であつた。

彼等が「全学連の任務は、革命的左翼潮流を拡大するには、いかなる斗いをくめば、最も有効かという観点から、ひき出されるべきであり、一般的情勢分析主義ではナンセンスだ」（全学連十回大会報告）と学生運動論のべている限り、逆に、かかる提案をひきうけないことは当然である。即ち、統一問題は今では運動論と全く切り離しては存在しないのである。

全学連の分裂経過をみれば、この自己の勢力拡大に、全学連を利用するという発想と全く無縁でないことが良くわかる。全学連の分裂を固定化させた全自連の結成というのも、学生運動の共産党支配をもくろむ

以外の何物でもありえないし、革共同関西派の大原君が、主流と反主流の間を右往左往したことも、何の原則性もなく、自己に得なように立ち廻つたにすぎない。旧共産同の華々しい闘いの展開に於ても、この発想が全然なかつたわけではない。即ち旧ブンドの大衆や、主流派の斗いを支えた活動家群とはちがつて、ブンドの上層では「全学連の運動をどう利用するか」という形での論争が行われていたのである。

我々は、現実の大衆斗争の展開は、もし、科学的であり、労働者、人民の斗いに忠実ならうとすれば、どの組織にとつても有利なようなものでなければならぬと考える。

即ち、コミンタインの三、四回大会でうち出された、共産主義者の大衆斗争に対する態度の原則を再び確立せねばならないのである。

労働者階級が存在としての革命性は、もつとも科学的な潮流を最後には有利にするという革命的楽天主義を断乎として貫く必要があるのだ。

労働者階級は、その存在が革命的であるが故に、その要求の実現への不断の進行は、必ずや、権力の問題を提出し、日和見主義

者は必ず断罪される。諸大衆組織に特別な任務を附与しなくても、その大衆組織が、共に大衆の要求実現をめざしていく限り、必然的に共産主義的闘いを展開せねばならなくなるのだ。そして、大衆は、生活と経験から学んでいく限り、権力への道は、要求の無数の系列でうめられており、労働者階級こそが、この系列を首尾一貫して追求出来るのであり、諸大衆組織は又、その系列を自己の性格範囲内で追求することが出来るのである。

もしも、大衆組織の伝統的指導部が、小ブル的であるならば、彼等は系列のどこかで裏切るのである。だから、自己の科学性に立脚する限り、大衆の要求の実現への最も正しい道を追求め、そこに基準を於て方針をうち立てていく限り、その斗いは、自己に何らの不利をも与えないのである。

総評の大会が、労働者階級の利益を実現するにはどうしたら良いかを中心として議論するのではなくて、各政党が選挙運動資金の取りあいに没頭する大会になつたという悲劇、ここにも又、大衆斗争に対する誤つた対処をみる事が出来る。

さきほど引用したマル学同の見解も又、これら、諸政党と全く同じ思考に立つているのである。

共産党は、二段階革命論の必然的結果として、現実の要求が、その要求の徹底的追求によつて、次のより高次の要求に転化せざるをえないと云ふことを得ない、これら運動の前進や、力関係の変化を、全体としての階級のもつ意識の向上や、組織の変化、拡大から考えるのではなく、共産党の伸縮を基準として考えてきた。それが結局は、大衆闘争は、党のためにあるのだという独断的思考を生み出し、安保闘争に於ても、アカハタ売りや民青拡大しか出来ず、果ては、自党のことしか考えない「民主的な選管内閣」なる珍奇な方針をうち出したのである。そして、「大衆は前衛を乗り越えた」のである。

社会党にしろ「議員選出」ということは同じである。

日本の運動を毒してきた、これらの党と大衆闘争に対する決定的に誤つた考えが、学生運動に対しても採用されてきたのである。

ブンドの「大衆闘争で党を創る路線」は

批判されはしたが、マル同は又、論理を逆転させ、「党を創る大衆闘争路線」を追求しているのである。

我々は、全学連がイデオロギーのちがいを認めたと上で、学生の要求を実現していく組織であると規定し、そのために闘う全ゆる潮流を結集したものであるべきだと考える。そして、その上での闘いの前進は、労働運動の前進と結合した学生運動をという我々の主張の正しさを必ず立証するであろう。かかる点から、我々の統一への具体的道は次の通りである。

- ①二五の闘いを関西、東京での真の統一の闘いとして展開し、それをバネに関西と、東京の指導統一組織をつくる。
- ②その後、関西、東京間での原則的一致を追求し、三月に両者のヘゲモニーで全国自治代を開催し、
- ③そこで四、五月の闘いの方針とイメージを確立し、四、五月の圧倒的昂揚の中で、統一戦線を否定するマル同を北海道と九州にとじこめ彼等に協定の必要性を痛感させ
- ④七月に全学連を名実共に再建統一する。

文化時評

『前衛主義批判』の流行に思う

前衛主義を克服せよという声が起つてい。というよりも東京から来る社学同のメンバー、或は旧ブント労働者達の共通の呼びかけである。このスローガンは我々もよく耳にして来た。即ち、谷川雁、浅田光輝、吉本隆明等々……の発言である。その場合前衛主義とは何を意味するのか。簡単にいうなら、綱領主義、つまり、日共から分離するとき、その思想方法を根底からくつがえすこと、二七テーゼ、三二テーゼといった綱領以来伝統となつた、そして戦後は五一年テーゼ、党章草案となつた「綱領」と「綱領」の対置、転換がすべてであり、それがいかに労働者大衆の生活からの要求を運動にまで高めるかの思想がない等々である。

転向論を通じ、或は主体性論を通じ、日本

二大階級の原理による斗争である。

二つの原理による斗争とは何か。それはまずブルジョア的な世界観とプロレタリア的な世界観を意味する。したがつて例えば労働運動における一つの潮流としての「民同」に対する新左翼の思想的な立場を展開しようとするならば、現代社会における二大思想の一つ、新しい社会を代表し、総合的な価値体系をもつマルクス主義にまず依拠していることをみなければならぬ。それ故に、何よりもまず生々とした、創生期におけるマルクスの思想の形成過程をたどることにより、新しい世界観のダイナミズムを自らの内部に復活することを、当然のこととして望むことになる。だがその次元をそのまま政治における発言に構すべしとせるときに、当然それは直感的なものにならざるをえず、それこそ生命がけの飛躍になり、おかしな「マル同」族を生み出すようなことにもなる。

政治の舞台における問題の解決は、このような飛躍をする個人的な素質のよしあしにかけることによつては、殆んど展望がない。即ちそれを現代帝国主義（様々な専門的分野の総合としての）における革命の原

理まで具体化しなければならぬ。このよ
うな革命の原理を具体的に媒介すること
より、政治に対する多数の個人々の自然発
生的な参加が、ブルジョアジエの組織性、
暴力性に対して、自らも集団として組織的
暴力的に対立することがはじめて可能とな
る。そしてそのような形成において階級斗
争が展開されることに政治的民主主義の意
義、ブルジョア社会の特徴がある。

問題は、基本的には、この次元で起つて
おり、この次元で解決されなければならぬ
。吉本や、谷川や、浅田の批判、前衛主
義への批判も、黒寛がなした原始マルクス
主義からの政治への飛躍を拒否して、あく
までも自らを「詩人」或は哲学者のまゝに
おき（即ち階級集団に入りこむことを拒否
し）、極めて個人的な立場から「一つの原
理」に依拠した前衛政治集団の思想方法の
盲点をナデ切りにするということになる。

だが、異つた次元からの批判は、それが
黒寛の如き実験を行わないかぎりにおいて
は失敗することはないにしても、立場の問
題からいふならば、主体的には「政治の問
題」即ち近代社会における革命の問題を究
極的に決しようとするものではない。社会

制度を改革する物理的な力量をもつた政治
集団を構成する様々の思想家の思想方法に
対しての発言（当然アバンギャルドらしき
直感をもつた）を通じて、一種のインパク
トの効果をねらう以外には何らなすべきも
のをたない。

吉本は詩人が政治に対して発言する状況
を政治家のだらしないさとののしる。だが、
マヤコフスキーのように詩を通じて政治を
語るすべがないとすれば、どうも素人的な
素朴な見方からみても、変な感じがする。
何よりもあつかいにくいのは、賢明にも
自らの位置を「詩人」の政治への発言、或
は道楽といひ切り、決して政治集団に移行
しようとしなない一人一人の詩人の立場を、
黒寛流に飛躍させる弟子が後をたないこ
とである。

労働運動は更にむつかしい。政治的には
民主主義の発展と歩調をあわせ、広汎な政
治斗争（大衆の政治斗争への参加）の土壌
ともなる労働組合運動は、また独自の原理
をもつて発達するからである。（勿論、ロ
シア、戦前の日本のように、条件によつて
直接政治的課題を中心にしてしまうような
場合もあるが）そこに思想方法や、革命の

原理を持ち込んでも、事態は悪化するだけ
だろう。大正炭鉱のように、根源ともい
べきエネルギーを持つ労働者集団をみつけ
ても、関根弘のように日立や八幡の臨時工
社外工を本工にぶつつけても、或は釜ヶ崎
や山谷を探りだしても、或は国際的にはア
ルジェリアの前にフランス共産党をダンガ
イしても、「力」は基幹労働者の側にあり、
臨時工を裏切りつつける常用工にある。

資本主義は、この基幹部分を「好況」の
名のもとに眠らせることができる。眠れる
基幹労働者の上に、歴大な労働官僚をつく
りあげることが出来る。にも拘らず、その
意味で典型的なイギリスの労働組合のゼネ
ストを予言したトロスキエを、即ちマルク
ス主義の資本主義分析を、むりさること
はできなかつた。かくて階級斗争は一つの
過程であり、永続的な革命の法則がそれを
貫ぬく。

谷川雁に、吉本隆明に大きな共鳴を感じ
つつも、我々は何かそこに特別のもの、例
えば前衛以前の政治理論、政治団体を見る
ことはできないし（無限の多数を獲得でき
るような）、谷川雁にかすかに「実験的な
もの」があるにすぎない。我々はむしろ、

かゝる逆説的方法にたよるよりも、真正面
から大衆運動論（戦術論）と、革命の原理
の探究にとりくむ角度の優位性によつた方

がいい。あせることはなくとも、時間もま
た貴重である。（T・H）

△全日ニュース▽

長崎造船社研の斗いとその問題点

安保斗争に、「全学連の戦斗的行動」と
して自己を体现した共産主義者同盟の思想
と行動は、いま、その分解過程にあつて、
あるものは、プロレタリアートの意識性の
問題に、あるものは、日本資本主義におけ
る帝国主義の法則性の探究に、またあるも
のは、国際共産主義運動の政治的、思想的総
括に、それぞれ自己の道を見出しているが、
六〇年の激動がうみだした問題意識、又そ
のことと関連していわゆるスターリン主義
と日共の非革命性に対する徹底的批判を、
組織的に、大衆斗争と結合した視点で展開
している組織は、きわめて少い。このよう
な新左翼の状態の中で、局地的ではあるが、
すぐれて組織的に、精力的に新左翼運動を
展開しているのが、三菱長崎造船社主義

研究会の斗争である。長船社研は、もとも
と、五三〜五七年の日共長船細胞の斗争の
中で、日共地区、県機関の無能力、無指導
に対する実践的批判から出発し、とくにそ
の没理論性（素朴経験主義と大衆追随主義
）に対する批判から、理論的に自己を武装
する過程をつうじて、既成左翼の思想形態
とは全く別個の思想形態を創造してきた。
従つて現在の社研においても、経営細胞な
いし研究会としては非常に理論的関心がた
かいこと、大衆指導に対する責任感の強さ、
が並外れた特徴である。

当面の労働運動に対する展望と指針、④
各観点におけるさまざまの日和見の潮流に
対する政治的潮流としての自己の方針の確
定、ということであろうが、現在の新左翼
の危機は、これらのあまりにも歴大な課題
に対する能力の貧困、及び、もともとプチ
ブル層を物質的基盤とせざるを得なかつた
自己の発生過程からくるところの、組織的
展開としての政治運動というより、思想運
動として矮小化されるどころにあるが、長
船社研の場合は、現実の労働者の運動とし
て、展開されているところに最大の特質を
もっている。

現在、各地の新左翼が大なり小なり共通
して直面している課題は、① 国際共産主
義運動の批判的総括、② 現代資本主義の
分析の視角、③ 日本における階級情勢と

そしてその唯一の注目すべき点は、思想
的厳格性の貫徹である。全造船の拠点とし
ての、三菱長崎造船労組の当面している問
題は、会社の攻撃と呼応した刷新同盟Ⅱ民
社の進出である。社研は、社会党系や、共産
党（社研グループの集団離党後に反社研Ⅰ
ズブズブの代々木路線の集団として急激つ
くられた。）が一般的な統一と団結とか、
労働者の力をつよめる、とかいつたコトバ
で自己の路線をアイマイにして勢力伸長を
はかっているのに対して、刷新コースの反
労働者の性格を徹底的に否定し粉碎するコ

29

1.スを対置している。

たとえば社研は、刷同のスコーガンの一つ「私たちは社会的経済的地位の向上をはかる」に対して会社の苛酷な攻撃に対する全面的な屈服、「常識的な組合」コースの反労働者を攻撃し「一切の闘いをこの資本主義社会の本質をみぬくなかで闘いぬき、資本主義打倒の方向と結合するとき、はじめて具体的な闘いにおいて資本家を譲歩せしめ、よりよい成果をかちとることができ。まさに「改良は革命の副産物」(レレーニン)である。」という。資本論の学習会が純労働者の独自にもたれるということにも示されるところのこの思想的厳格性が会社はもちろん、民社、日共等の集中砲火をあびながらも反刷同の最も強力な推進者として分会執行委員や拡大斗争委員に社研派を当選させる支持を得ている最大の武器となつてゐる。つまり、資本と賃労働の非和解性の意識の注入が、労働者階級に決定的に必要なものであることを立証している。その意味で三菱長崎という単位で、労働者階級の立場に徹底するという組合主義が生きてゐるのであるが、労働組合運動が改良斗争の遂行団体という組織的制約と、

組織的大衆運動の圧倒的昂揚が、そのスコーガンのもつ改良主義的色彩とはべつに、必要不可欠のテコとして、権力の問題を提起するという関連性についての展望が、社研段階でも考えられないだろうか。合理化、搾取の一層の強化という会社の攻撃、労働者に思想的武装解除を要求する民社コースに対しては、労働者に対する階級としての思想教育の対置は絶対必要である。社研が反刷同、反スターリニズムの労働者教育の組織であるだけでなく、日本の労働運動に対して、新左翼としてもつてゐる大きな意義は、長船社研が、菱労働、又、全造船の運動として積極的介入し、日本の労働運動をおおつてゐる政治的潮流(思想的潮流としての民同思想というだけでなく)としての総評民同の支配を左からおいおとす展望を運動方針としてもつことを期待したい。オ二の注目すべき点は反スターリニズムの徹底ととらえかたである。機関誌「社研」では、毎号、精力的にハンガリー問題、フルシチョフ新綱領、ベルリン危機、その他、いわゆるスターリニズムの歴史の偽造と毒害の数々をときあかしている。これらの点について、スターリン代々木製の神

話が通説として学界から、ひろくブルジョワ、ジャーナリズム、そして労働者階級の間にちこまれてゐるときに、歴史の真実をつたえ、プロレタリア革命の導きの糸口として、国際共産主義運動が総括されねばならないことを考えると、その意義は大きいのであるが、それは、いうまでもなく、事実の例証や、表面的な左翼の原則の対置ではなく、それらの運動をつらぬいてゐる原理を、原理として総括しながら、革命運動のみとおしをたてなおすことに目的がある。そうでないと、ブルジョワ、ジャーナリズムや既成左翼がスターリン批判を「雪どけ」として評価してゐると同次元で、せいぜいそれを政治の領域に拡大し、注釈をくわえ、全体を「官僚体制反対または打倒」でまとめあげるといつた非生産的、非政治的な思考になつてしまふ、ベルリン危機についても「ブルジョワ支配をつよめる東独労働者の逃亡反対、西独労働者の行動反対」といながら「その本質はスターリン主義官僚による東独労働者階級の抑圧にほかならない。」(社研六号)では、スターリンの政策としての一国社会主義論の延長としての東欧経済圏政策の破綻と社会主

義圏のどの国家よりも旺盛な成長力を示しながら帝国主義の最大の困難性である市場問題と盾環局面の圧力によつて政治的、軍事的緊張を要求するところの西ドイツの帝国主義的政策(それは、フルシチョフ、アカハタがいうような単純きわまる一般的な好戦性ではない)との接点を説明できないし、危機の体系としての現代資本主義を具体的に把えることは尚更困難となつてくる。

世界の既成左翼をおおつてゐる二つの体制論Ⅱ図式主義に対しての政治的リアリズムをとらえ、労働者階級のものにしていくことこそが、われわれ、及び長崎社研に課せられてゐる新左翼の任務ではなかつたか。果敢な斗争に敬意を表しつつ、われわれの重大な責任を果すために、あえて問題点を指摘した。(S)

△全国ニュース二▽

烽火編集委員会を中心とする

関西ブントの動き

先日いわゆる「関西ブント」を共通の基盤とした烽火編集委員会、関西ブント労対、社学同の責任者会議がもたれた。討議内容は社学同京大支部を中心とした同学会、教養部自治会選挙において、社学同がマル同、代々木、構改派を抑えて圧勝した事実(委員長で② 九七五 ③ 四二二 ④ 二二二 二構 一二七)を確認し、京都府学連を中心とした公安条例斗争の意義が日本資本主義と労働運動との関連で位置づけるこ

との重要性が強調された。そして社学同の独自のなとりくみとプランとしては三月をめざした全国大会、四五月斗争、七月全学連定期大会へのスケジュールをくみ、全国オルグ体制をとることをきめた。他方労働者Sとしては大阪を中心に現実の斗争過程を通じて左翼的労働者の結集がすゝみはじめてゐる点が強調された。特に東京の京浜、西南、共産主義の旗の各派を中心とした東京の動き、九州の動きとの関

係、及び大阪を中心とする今後の展望の重要性、及び大中電の活動の報告は、内部に再整理、新しい再出発という課題を含んでおり、それらにみあつた全国政治指導部結成を要求しているという発言があり、それをめぐつて今後の展望が内容的に探られた。これらの討論の集約点は、社学同や、長造、大中電などにみられる労働運動の動きを支持し、支援し、その全国的な発展へのカギを理論的、政治的に見出し、全国組織の誕生への過度的な任務を果そうという意味における烽火編集委員会の今後の活動の在り方にむけられた。具体的には、以前と同様のブント関西地方委員会を復活させるか、或は社学同、労働者ブントの独自の全国化を支援する所に位置づけるかという点である。結論からみるならばさしあつては最高限に執行能力(即ち政治的組織的な指導力)を烽火編集委員会にもたせて行くこと、そしてそれを先号で紹介した事務局の強化十組織担当グループの常設という形で具体化することが確認された。そして編集委員としては先の飛鳥、浅田、中島に京大社学

同推薦として、渥美が加わり、更に大阪から大崎、園田、木山となつた。討議はこの他、マル同との反スタ・「ソ連論」を理論の部門でとりあげる事、及び春斗にむけての全国的な活動家討論集会を開催することなどが確認された。

今後の組織問題としては未確認の問題、未討議の問題が多数あるが、有能なメンバーの編集委員会、組織担当、事務局への結集によりはりきつて解決していきたい。

(A)

冬期必読文献

トロツキー 『永続革命論』

『過渡的綱領』

『次は何か』

レーニン 『帝国主義論』

マルクス 『共産党宣言』

グラムシン 選集 ①

雑誌 『経済評論』 六二年一月号

月刊 『労働問題』 六一年十二月号

六二年 一月号

△職場だより▽

ふきあがる若年無党派

活動家のエネルギー

— 民放労連年末統一斗争から —

民間の主要単産が炭労の申し訳げばかりのようなストを除けばほとんど実力行使らしい斗争ぬきで年末斗争のホコを収めた中で、もつともめざましい斗争ぶりをみせたのは民放労連であつた。「十万円以上のデラックス・スト」などとジャーナリズムにひやかされながら、ほとんどの労組が満額、もしくはそれにかなり近い線で妥結した背景を考えてみよう。

民放労連(五〇単組、一万二千人)中立系)は、その企業の新しさに比例して、きわめて若い組合である。民間放送が開始され、各地に、地元、あるいは全国的新聞資本をバックに民放が設立され、激化する過当競争の現象を最も鮮明にえがきだして、電波業界はここ一・二年の間、毎年売上高

は前年の二倍近く達成する有様であるが、一方このはなやかな職場で働く労働者のイメージは意外にも重い。この産業の平均賃金(二万四千円)平均年令二七・五才、家族構成平均一・五人)はともかく、不規則な労働時間、非人間的な生活を強いられる超勤(たとえば朝日放送ではこの四月に超勤協定が結ばれるまで平均月八〇時間以上の時間外労働を強いられていた。)企業の若さからくる管理職層の無能ぶりが、直接現場の過剰労働となつてくるような職場、こういう状態の中で、技術系(主として高卒)製作・業務系(主として大卒)ともに、しだいに芸能界との接触からくるヤクザ根性、又は職人気質からぬけだして労働者としての目覚をたかめてきた。昨年から今年

にかけて、日本テレビ、読売テレビや、関連業種である広告代理店の組合が続々と結成され、ついに今年十一月には東京のフジテレビとともに日経連(鹿内)水野ラインのマスコミ政策の拠点である関西テレビにも組合がうまれた。そして今年の年末は民放労連としてはじめてといつてもよい統一斗争がくまれ、①前年度実績プラス二万円組七万五千円以上の方針で統一要求がだされ、多くの単組が実力行使を背景に斗つた結果、ほとんどの単組で要求をちとつた。とくに関西の拠点となつた朝日放送では六波、八十五時間にわたる実力行使によつて、要求(十一万四千九百円)に近い額(十万三千円余)をかちとり、処分要求をはねかえした。これはテレビ業界がもうかつているとか、年末のブンドリ合戦だとかいう以上、みかけのはなやかさのウテにかくれた前近代的労働条件に対し、労働者としての立場にたつことをつらぬく姿勢でこそかちとれた。最後まで組合の指令の下に統一が保たれ、職制層に対するツキ上げ、さらにネット・ステーション労組との共斗がくまれ、企業意識は、労働者としての団結意

識によつて打ち破られた。とくにこの若い組合の斗争が、どの単組でも政党・上部団体の指導なしに、無党派活動家の手によつて果敢に斗われ、しかも斗争の方向がブンドリノ妥協ではなく、斗いの原則(労働者としての立場の貫徹及び産業としての統一斗争)が明確にされつつあることは、特殊な産業(芸人気質がいまだに重用され、ひるがえつて自己を見れば一週間先の生活プランもたないという労働者)としては注目すべき斗争であつた。

現に大阪放送労組では、この斗争の中で、超勤手当、有給休暇制の確立、配置転換、解雇等人事にかんする事前協議制の確立を

職場だより二

京大教養部自治会選挙

社会学同の勝利に終る

12日、京大に於ては才三期教養部自治会正副委員長、並びに才六期同学会全学区代議員の選挙が行われた。その中で我々社会学同(京大主流派)は圧勝した。教養正副委員長選挙に於ては、

京大主流派候補(社会学同) 山下九七五、茂田九二〇
全学連派(マル学同) 長友四二二、松島四二六
統一派(民青)

西村二二二、重森二二六
再建協派(構造改革) 松島一二七、樺島一二六
同学会全学区代議員は 社会学同12名社会学同レフト5名マル学同5

名民青2名と半数を抽占した。

確かに今度の選挙斗争は新入生の新鮮な問題意識とマッチした春の華やかな選挙とは異なり、全国的な学生運動の低迷と混乱に起因するところの沈滞のムードが京大全学を覆つていた為、極めて苦しい闘いであつた。このような客観条件の中で、「米ソ核実験反対」、「日韓会谈反対」、「公安条件粉碎」のスローガンを掲げ、選挙斗争よりもむしろ12・8斗争に向けて、最大限の努力を傾けた社会学同は12月8日を政暴法斗争以来の最大の動員を勝ちとることによつて、真に斗い、真に層としての学生運動を展開していく社会学同の姿を学生大衆の前に明確にし得た。

一方民青の諸君は、相変わらず日共万才主義の態度を固執し、「ソ連は平和勢力だからソ連核実験を支持せよ。」と主張し、学生の平和に対する要求をくみ上げ、結果させ、その中で真に平和を守る為には如何にしなければならぬかという問題提起をして斗うという方向の追求は何らなし得なかつた。

ここにいたつて彼等は、決定的に彼等の学生運動の指導無能力を暴露し、必然的に

かちとり、そのほかでも専従をみとめさせるなど、組合としての権利をつらぬく形での斗争がくまれた。

このように強引な人為的市場創出のため意識的につくられた企業と卒卒の若年事務労働者として中間層的生活意識を基盤にした産業であつても資本と賃労働の非和解の対立がうみだした矛盾はしだいに、その意識の交革・職場斗争の徹底をつうじて労働者としての権利の確立が法的につらぬかれようとしている。

しかし、資本の攻撃は、今回の斗争によつて、組合対策を真剣に考え、一方では労働者そのものを無権利状態においこもうと

各クラスの自治委員選挙に於る著しい後退、学連、京大同学会に対する組織的・系統的弾圧にも見られるように、景気後退を目前にした日本ブルジョアジーが、公安条例の徹底的拡大強化等に見られる著しい治安攻勢、反動攻勢、合理化攻勢を展開せんとするのに対し、一層の学生戦線の強化を要求されているという情勢に対応した最も正当な方針として一般学生に受け入れられ、マル学同の学生運動論は明確にその破産を示した。

このように、才一期・才二期の選挙斗争を通じて宿敵であつた民青諸君が、大衆に背をむけられて選挙戦線から敗退していく中で、代つて登場したマル学同は選挙初期に於ては低滞した学生間の心理的間隙をついて、「米ソ核実験の死の灰に反対しないのは、人間失格である」という浪花節的北小路発言に見られるような右翼的アピールと全学連派々という権威主義的名称で我々に苦しい斗いを強いた。

しかし社会学同はマル学同との論争の中で学生運動を如何に展開すべきか、全学連を如何に統一し、全国的に分裂した学生戦線を強化していくかという問題について、マル学同諸君の全学連の私物化を正当化しようとする主張に対して、「全自連再建協の即時解散、無条件の統一大会開催の要求」を主張して、統一の問題を学生大衆の前に明らかにした。

この問題に対する我々の主張は、京都府

するであろう。(現に読売テレビでは、正力が直々のりだして、読売新聞争議時代のボスを先頭に徹底的な弾圧にのりだし、全読売資本対二百人あまりの組合員の斗争になり、不本意ながらも、超勤問題、処分問題で目的を達し得ずに終つた。)その意味では明春の春斗が、若年労働者のエネルギーを唯一最大の基盤にした民放労連の試金石となるであろう。(園田)

我々社会学同はかくして如何なる潮流に対しても理論的優位性を示し、圧倒的勝利を獲得した。このような戦果の上に立つて、東大教養選挙に於て僅の差で社会学同に破れた東大社会学同等を始めとする全国の社会学同と理論的統一をはかりながら、春斗に始る四・五月斗争を我々のイニシアで全国的斗争として勝ちとることによつて、セクト主義的なマル学同、日共の誤謬につき、六月の全学連を真の統一大会として開催しなければならぬ。

これこそ、京大選挙に於て勝利した我々社会学同にさせられた緊急の任務であり当然の義務である。

(茂田)

編集後記

一、全体として情勢は春斗へと集約されつつある。帝国主義の市場問題が国際情勢の

カンクになつてゐる現在、その中にあつ

て停滞に入つた日本経済に早急な打開の見

通しが無い以上、大巾賃上げを中心的スロ

ーガンにした労働者階級の闘いは、単なる

ク分取り斗争以上の性格をもつたものと

して展開されざるをえないであろう。その

とき民同の枠をのりこえた労働者階級のエ

ネルギーに拍手を送るだけでは、既成の枠

をのりこえよというかけ声だけでは、その

歴大なエネルギーは資本の論理によつて必

然化されたものとしてのみ、即ち自然発生

的なエネルギーの無指導なまゝでの発散

アナーキー運動としての意味しかもちえ

ない。既成の枠をのりこえた労働者階級の

エネルギーを組織化するのみならず、更に

それを全体との関連で日本の労働者階級の

闘いの方向に反帝・社会主義の闘いへと組

織する方策をさがしださねばならない。

全国ニュース②でふれているように、我

々も独自に活動家を結集して春斗へ向けて

の討論集会を全国的に組織することを確認した。たゞちにその準備にとりかゝろう。

一、予想していたごとく、京大同学会副委員長長浦野君（社会学同盟員）がまたもや京

都市公安条例違反で逮捕された。

安保以降混沌とした学生戦線の中にあつ

て、一貫として大衆斗争を組織し、公安条

例斗争を十二・八の闘いへと発展させてき

た京都府学連への権力の弾圧は、すでに浅

田府学連委員長、濃美同学会委員長、新開

同学会書記長、茂田京大教養副委員長の四

人が公安条例違反で起訴されており、浦野

君に対しても同様の処置がなされるであろ

うから、今後五人の公判斗争をかゝえての

公安条例反対斗争を進めなければならぬ。

しかも関西の学生戦線の一応の統一は完

成されつつあるとはいへ、全学連十八回臨

時大会は、我々の統一大会にしよとの申

し入れを拒否して再びマル同の私的集會に

されてしまつたため、全学連の統一した運

動の展開は来年の春以降にもちこされた。

更に試験期という学生運動の特殊な主体的

悪条件を向えて斗争はきわめて困難なもの

とならざるをえない。

とはいへ、一・一六羽田斗争を成功させ

た経験をもち、日本学生運動の輝かしい伝統を継承発展させてきた京都府学連は、この公安条例斗争を最後まで闘い抜くであろう。たゞ、五人の公判斗争の財政的保証のみがピンチな状態にある。

京都府学連の公判斗争を財政的に援助し

よう。組織的なカンパ活動にとりくもう。

一、一月十五日発行予定の次号を理論特集

とするため、今号の理論の原稿は次号にま

わすことにした。

一、「烽火」は、巷に充滿しているような

左翼綜合雑誌ではなく、運動の方向を指し

示す政治指導理論を媒介としての新左翼の

全国的組織化のための武器として、明確な

織的方向をもつたものとした。したがつ

て一般の読者からの寄稿を無制限にとりあ

げるわけにはゆかないが、我々の一歩々々

と進めつつある方向に対する積極的批判な

らどしどしとりあげてゆきたい。その意味

で次号から「読者の声」の欄をもうけるこ

とにしました。読者からの積極的な意見を

期待しています。

「烽火」の入手困難な方は直送しますか

ら労働者協会へ連絡して下さい。(Y)

